

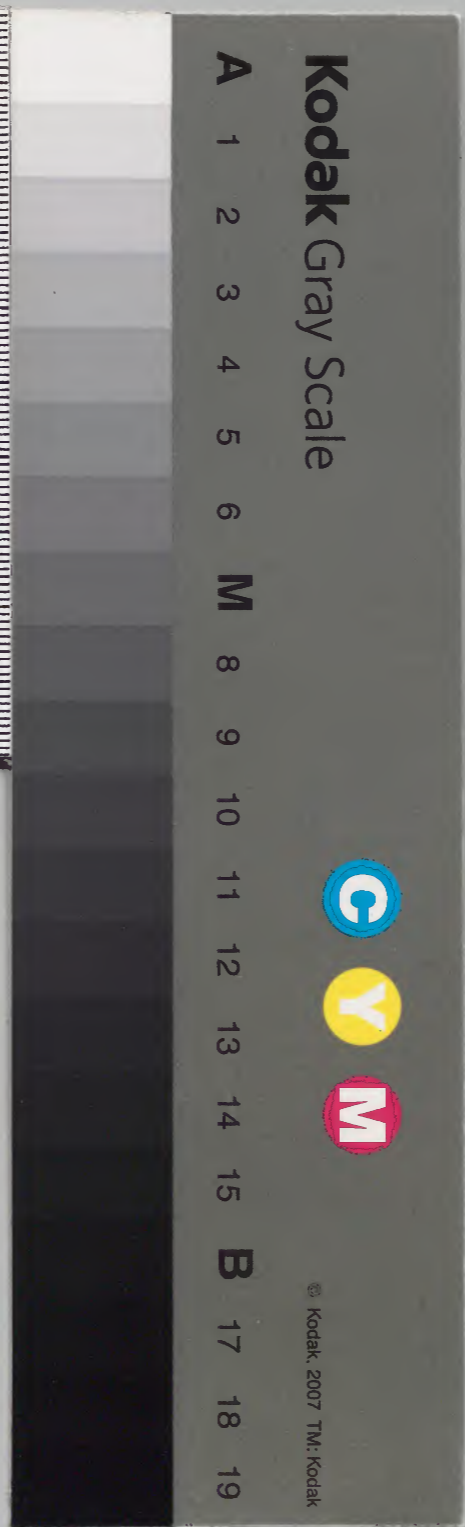
真際雜記

一十九

和書門	
二七八四二號	類
八函	
三架	
六九冊	

內閣文庫	
二七八四二號	和書
六九冊	
三函	
二架	

內閣文庫	
番號	和 27842
冊數	69 (18)
函號	213 3



辛亥雜記

十册

嘉永四年辛亥五月廿日
同月廿六日 稿成

真深雜記

真深雜記

此如重藤屋中少業有吉行孫

右坂比代友竹垣三右衛門廣中宮部孫中少業

去子種三位有切心入頼家のつゝ入る傳をる

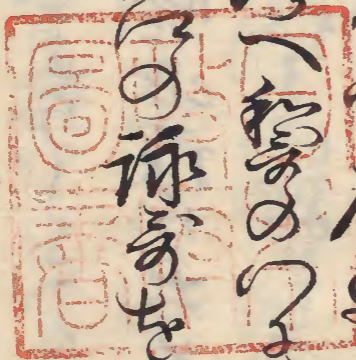
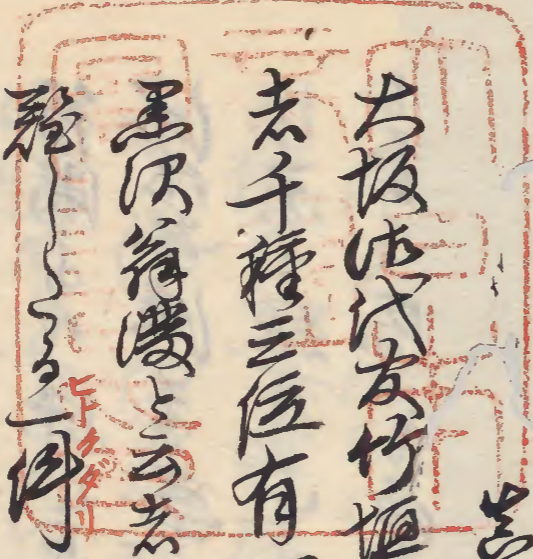
馬込翁漫と云ふ被の詠を乞はる後二

種一何

子種屋より給る懐紙の事

馬込翁漫初く訪ふん

三位有切



明治十三年購求

皮のちを冠し... 考の白紙の間に通る
... 此の書は方へて通るは

二の書の... 類書... 抄成...
一 存傳... 孫... 書

... 宗考... 書... 抄...
... 法教上物... 抄... 上... 成...

... 海... 抄... 上... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

... 斗... 抄... 抄... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

... 全... 抄... 抄... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

... 抄... 抄... 抄... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

... 抄... 抄... 抄... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

... 抄... 抄... 抄... 抄...
... 抄... 抄... 抄... 抄...

のりまゝに海をさましゆくもの事時世俗要圖の海を記す
中より人なるを記して言はば解の成り及又右より
本解所より文字の成り来る所を記し仕方備え
るに法を記す其法を解し通る所より記す其法の
事より自記のりより記す此法は海を記す其
法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す

二月十日

有功のり毎を録しゆく(一)又

道より常事令持えし海国より記す其法
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す
其法より記す其法と有おもし中より可然法を記す

おる。

手続の... 何... あり... 行政...
三... 備... あり... あり...

ある上代... 和漢... 漢... 漢...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...

あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...

あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...

あり...

あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...
あり... あり... あり... あり...

く抄は有るに平養因縁無しのものなりとおあり
の底にあつた度古家の樂が七のよき如存漢の
源氏何首抄著一節漫かたきよと存存きよ
福對面より談論を〜〜〜に驚入るりよ
海より是と信の人のよきおありと存存
あつた〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
中よよとあり是長くよとて言入通達に〜
き〜〜〜の儀と通合におよび〜〜〜の取
ま〜〜〜の〜

あつた〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

一笑の終り 空 ち亦并庵より抄寫

と兼居士云耳梨山の太初のよき所

一 社の神前より鏡を載るもの推古天皇の御時

特上學部より三輪の御神の昔にきき

照くもを載るもの

右或人の記におあり友人の話鏡の神代又増え

鏡有る

一 近代古本盛書記写本三十卷撰考詳も〜〜

の略は皆成り先一三書に在り抄也

一石田三成は為成す一石田信成は為成り信成は為成
略は為成り信成は山家河原に三成を臣下乃
思遇思はして父を奉りて五位下を叙し先先列は藤原
石を以て並に叙任す考の及仲お軍を討つ石田
為成は為成り三成を攝政の位に上りしは三國を以て
は一三書一説は百五十石にて征軍はある年十八と云
後五箇年對思有遂に石河沈和山の極とあり徒四信
治部大輔を叙任し二十三年壬午三國を討つ慶長五年

唐子九月十日信成河原を以て

神祖と我大に敷乞引自平吉部大輔吉政より家入河原
持左より河原信成より為り石河河原の嶮岨より慶
長五年石田三成は中西行長を國守と為りいとせよ法中引
海一三條河原より梟首せしむ

先重成に在り石河大史和成

三書成の軍の守りあり抄也

九月十三日沈和山を討つ和原信成は為成り藤原一勝十七
人正書に在り自叙一三書は婿男身入心十二人

九月十七日の夜、大坂城を思ひ、陸奥津經（此は徳所）
子誓存す、と縁津經と有と云

一 島左近勝頼の討めの為、息男竜吉、勝安女松原
を討つ。 其時勝安女、同く京まで討死、左近を
討めへ、去る島左近、南無入、移り、此島は、日名の
如く、時那、有力な、根拠とて、たると云

一 大坂城の補給、吉澤の夜、大坂の士平、
略平、とて、十段の比、う、を、大坂、在、國、中、を、付、置、
五、百、石、藏、河、野、野、の、城、を、成、國、の、家、と、因、田、堀、の、傍、
祐、云、と、云、と、有

一 母羽長重、寛永四年、丁卯、田三月、四年、年、と、十七

一 大坂吉澤の男、吉澤、舟、市、下、山、城、を、於、繼、り、元、和、元、年、
大坂城、舟、と、討、つ

一 長谷川、為、五、平、秀、一、の、十一、万、石、城、前、大、坂、の、城、を、と、十、
三年、七月、從、四、位、下、侍、從、を、叙、任、し、文、祿、三年、二月、從、
侍、を、被、地、り、て、病、死

一 羽柴、丹、波、も、秀、勝、の、後、同、大、坂、の、男、三、位、中、納、言、と、
叙、任、甲、府、十、七、万、石、を、所、領、せ、り、一、同、年、同、所、に、病、死、
此、所、が、長、當、時、は、薩、本、子、京、孫、也

一 山鼻川邊の筑前國三十三萬五千石を以て遂に後三
任權中納言に叙任す慶長三年丁酉五月十三日
逝年五十五

一 安國も島原長老の十二萬石を以て島原守の瑞甫と
云ふ藝太坂田郡志良村の産也慶長五年癸子十月
朔三日はあまの嶽のせしむる年

一 山崎掃部行長は二十萬石肥後宇土の城主なり後
四位下侍に叙任す西津島に於て其後世宗家
塚の高入と稱長を以て掃部といふなり

一 宗對ももろ年と成慶長五年十月朔日西國國
世宗家弟行長は三條河原より京東看せしむる

一 上杉宗勝元和元年癸亥三月廿五日逝妻秋と十九

一 立花宗茂建興柳倉二萬石を以て慶長五年乙未
乙未四月廿日思後柳川松十萬石と百四十七石を以
て宗茂宗永十五年乙酉二月廿日思後宗茂と判後三萬
と宗茂同十四年壬午十一月廿五日卒年

一 宗茂 拍子内膳也 二百二十石を以て

一 宗茂 宗茂の祖の妻の神の社宗茂中坊之

高徒の持梁と

一 毛利元就元龜二年辛未六月十四日享年七十五
因輝元寛永二年乙丑四月廿七日逝年七十三元之
中国十三万二百十の万石

一 市川長清子の万二千石高徒下女お肥前後を担任
名定勝後 市川肥厚も常定初孫也云々十年
揚子昭政撤さるる千石を以て後侍中を以て祝辭
二位法皇より号賜り常後二利房三延房四信定其の
秀秋は市川お七の孫と云

一 福喜の父に在るは云々を揚子半國のまじりし時
百石を以てて一萬石の初号我城の武切奉り
新編一子に遺進志津城の功を以て五千石を以て
三年とあり故に那に治の松十石を以て後尾不違所
二十万石の奥湯有慶長五年藝予四十石の千石言
神祖より新恩有元和元年二百廿從三位守お小敷任す
同五年己未六月お白派刑治あり川中島元和二年
有申九月十四日揚子昭政を以て常後下女お肥前後西宮
寛永元年甲子七月十三日逝年六十四大福院殿

備後守正勝の男左衛門正長は正高の男市村
正和元年辛酉四月十五日百四十九二千石上総の國
の中より給ひ入 伊豆守に任

一 肥後守加藤清正徳永祿七十三年千八百四石慶長十
二年六月廿四日卒享年五十一息正廣寛永元年
壬申六月廿八日河井左衛門正成左衛門時
之曾方可定正定 才似正定西又也
三十一卒如一妻 醒來店內破簾中

此時正廣三十一卒三年三月肥前守於享年五十七

正高の正廣の血統は店內條の長として祿永五
石より代り執事のす諸代血統正定と云

一 高松の近長房の持守言概七石石こふ成治の
長一より加藤の正成に正子正記を上継ぐ途
回家の長とせしむ

一 仙臺正宗寛永十三年丙子五月廿四日逝享祿七十
石高の瑞藏もまた兼瑞藏も殿前黄の正三正高
利也と名士

一 淺井みちる源長勝の持系宗利の妹嫁すして尾家

七十七歳

中村の入道長女の子のきこ長勝杉原宗利の女
子とて養ひて入道長女の子とて嫁會
保長長女の子とて

一杉原の祖武の流平末國の^{正徳}宗室の三世伯耆守
光衡杉原と号して四代七年^{正徳}宗利と号して七年
宗利は杉原と号して十二年癸未九月卯年五月十
七日卒し海庵と号して^子宗利長房伯耆守と任父宗利の
の宗室と号して^子宗利と号して

神祖と号して一慶長六年常陸新張郡山栗庄五

千石加恩寛永五年二月四日於江戸病卒年五十九
子^{福吉}宗利伯耆守と号して長房伯耆守と任^{正徳}宗利の^子宗利
房寛永七年十二月卯日伯耆守と任正保元年十月
三年去妻子女中城守と号して常陸の三男平力重
元宗寛永九年癸巳十月十四日早世十七才に
嗣子なく封を賜ふる伯耆守と号して長房伯耆守
後二と妹とあり小栗おねと氏と相城三と号して常
杉平伊賀守と大清掃部守と任正保中掃部守
市井左衛門 宗室成

一 漢聖孫の孫長政の孫四位侍從の教行一 慶長十五年
辛未四月より二十五日一 年吉崎男紀伊守幸長
孫四位のり又教行一 同十六年癸丑四月廿日
年吉羊三十一日と分担する長景孫四位侍從の教行
元和七年安藝備後兩國四十二万五千石の賦を因
湯有寛永九年（清）六月廿日年四十七日一 年吉三
男光景元和三年八月十日於紀伊守幸長山誕生初名
宏格九孫四位少将紀伊守の教行す母の
神祖の姫君初孫生幸行一 娘秀行年吉の孫一

^{元和三年}。長景一 孫一 女一 生幸有一 男光景一 姫君幸長
同三年八月廿日遊幸

一 平氏伊勢伊勢守母一 皇利お室一 是く世々伊勢守と
云伊勢守氏一 成一 世々一 政行一 一 京者もお伊勢一
起新お平氏一 政一 孫一 同のちも一 川刑部大輔
幸の氏一 成一 孫一 一 孫由一 一 川前一
是く長祿二年皇承並山の故一 成伊勢氏也
及て小桑と号の應元三年一 中回第の故一 大藤
能事一 實一 孫一 一 孫一 一 孫一 一 孫一

氏茂判筆して、乃早雲宗瑞の身置の事
成、文龜三年、子と云ふ、大京大夫の氏綱

氏綱、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

大京大夫の氏康、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

氏康、其の房可を上総の氏綱、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

常陸の氏繁、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

又有一子、末男、大京大夫の氏勝、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

神祇子、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

死居せしむ、文祿元年、壬辰十一月、四日、氏康大坂にお

き、乃、賜、後、宇、去、年、三、十二

氏勝、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

正徳三年、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

十七年、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

年、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

石加、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

万治元年、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

三助、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

一、其の房可を平君して、平子と云ふ、氏康

一 片桐助也重隆は孝子なるを奉りて三十二年家
志津ヶ嶽の教を拜し五右衛門と号す其の勇士を付
取三千石の感状を給て後平白と任寸遜は四万三千
石とありを奉るの後秀頼は入後

神祖は徳あり一石をも加給元和元年五月廿九年
男神皇正統記孝利嗣子と家傳する亦孝元は一石をも
給孝高葉之隱心貞隆は孝元之先代

一 寺井大徳以利勝初と三十二年
神祖の由中世より父を寺井大徳利勝といふ事とす

水野中野孝元の子といふ又

神祖の傳は流しと云遜

台徳廟 大徳廟 有朝の執政と成徳回任おる

教任の言十石を成す正保元年七月十日

七十丁一丁半と云は成徳寺抄記にも案法名

宝徳院殿前拾遺徳孝素翁是云居士

一 尾本神宮の古指と云り大進院と云

一 蒲生氏今文禄四年二月七日百松京土古年吉年

四十辭世

一 河内有らびてし元は散りていづれも善の山風
 法名昌林院殿前参院統三位言宗太公大臣
 定の神祇崇拝又昌林院を建て奉
 一文禄四年の比石川五右衛門 上ら者奥の石川
 の善こし、大主罪人にて後より京考へてり
 此人を善しめ西運云斗りも、徳をさすの命を
 て五つらも擗捕五つらも母同敷か四人廿一
 日中をぬの大罪人にて三乗河原に於て棄體し
 せしめ是を罪の刑に

一 鍋島加賀守直茂法男

三 右殿

右社廟より清一字詳録 和泉守に任初名伊平を
 大猷廟へ奉りて於下総國の内中なるを給也
 宗亮清法を時茂より一万余の内添也

三 右殿

隆平を中宗命方一万余子細有て返す寛文四
 年十二月廿七日隠居

三 右殿

平刀

在る 平刀

長行 内通 実信 兼光 茂三男

是々の福多伊豫守本心の子実中家信従高直
御后のは男内通に在孝御后の女也 是の是原の女也
一本虎探の中家虎波も正行の女も御后を以て
せし書也

一 伊豆細室御后万治三年 赤子七月十九日 隠居
伊達安藝守常守の上所の寛文十一年二月 三月廿七日 高直
四月三日 伊達宗勝代啓

一 得利 伊豫守家

利三

高直内務助母の御后に有る光秀の妹書し御后
御后も長通入る一統の娘と云十年光秀薨
の後を承る御后

三存

高直内務助

台建一 百廿五千人を給

利光 成

右段御后は任常を教の時と云し慶長元年甲子也

空作書

三光

我孫子實の同姓地と進男初名實内 下尾是牙

系

利平

高及抄母實の聲高及太三郎の男

稻葉三勝

定右忠丹後守

稻葉三利

内記細川右兵衛入道新肥後よて宿禰

女子

高事高意の后梅第抄母高事抄母孫千石

女子

梅武アの神室

女子

川窪敏前高姓を重國と改姓唯三子の室成

女子

結山十左の妻

女子

賴朝御海老原老格弟五左馬

一高安河原守利光三男の御女つと所時長つとの妻
と成幸はきと成幸すつと解男女の兄弟はつと有つと
望早世す

一高安利光の御女つと高安大つとの御女つと有つと此御男つと母
利光利光の妻つと成幸男つと他つと進つと家つと大つとの御女つと
加賀守つと成幸の家つと分つと五つと元つと不つとを統つとえす

望格弟

一廿のり子撫つと祥つとをつと八つと中つと格つと依つと倉つと候つとのつと慶つと信つとをつと
んとつと高つと安つと早つと有つと字つと也

一務守つと高つと安つと出つと才つと高つと七つと享つと保つとのつと度つと新つと恩つとをつと以つとてつと百つとお
さるつと 公つと実つと家つと秘つと録

一那波及園つとのつと紀つと伊つと南つと新つと公つとのつと御つと女つと

一千宗つと依つとのつと利つと休つとのつと若つと孫つと也つと同つと公つと也つと

一因宗つと老つと藏つと中つと神つと奈つとのつと祖つとのつと津つと路つと也つと重つと良つと也つと

一因藏つと安つと後つと平つと力つと由つと治つとのつと二つと世つと知つと父つとのつと由つと治つと

一水戸光國つとのつと元つと禄つと三つと年つと。此つと院つと名つと同つと月つと四つと日つと申つと納つと也つと也つと

- 一 板倉周防守平富元和元年三十から才まで京職に任
三十餘年勤仕
- 一 案より侍所の清盛の権を削ぐに法然
より布施を遣はれ、由平初におく同族の現
存國院と皇宮の涼室をいふ一團つ有
- 一 元祿中の京老河を以て松前伊豆守の老を慶長より
一 小栗安房の氏也
- 一 江戶の初代一徳田和泉守の老の法然（和泉守）
- 一 有徳殿より也

- 一 黒田如水入るに伏見の移り年去り 本隠叢話
- 一 徳前の老の老政の臣系に也 一 徳川了の身也
- 一 上杉謙信大弼從四位侍治憲おほの隠存より
考しと異なり也 初名を由ぬと云案の龍前（龍前）言續
- 一 秋月長つも種実おほの法男也 （法男）を侍従大治重定
- 一 おほの初代の時より表をいへ上杉の成を嗣
おほの近世の名を賢とせし世に尊せられしこと
- 一 片在戸の中書簿 一 其君の言行を著して

翻楚篇と云

鷹山老侯實文秋月種男の御后病癒の款米沢の
院邸へ書事りしと實文者病の爲とて院舎より
ら御府成親を以て自ら痛所療治の事して
七年丁未六月府中へ書事ししと九月十九日
書事しし御執政の方より命せられし事
也 概有し

御月尺書 作付一上 上意有し

病業を推して能也 概政シタ 年未國

政道一修し可し 思召様より澤書

御月尺年々於此の書院御類老中列中松平
國房康後書中後 上杉越前守治憲

當職早事隠居也 作付の迄國政格列

有し伝達

上使一修し後也 思召の事迄は後又事

人病御の概也 作付の

右年々隠居後也 百也 概左傳也

思召の事迄御三の降也 思召

一 準提菩薩靈驗記全下保土二年辛丑八月既刻
東嶽山善寺院蔵板

一 辛亥六月十日移住舎平曲

右燈合戦 勝雄 中生島 杉谷町家

手書前 坂坂接 右接連立 石河

園坂寺入池 言持 本芳野書 福江

文見後行 巨願 種幸 富田園

上る 田舎 望

一 元祿の比昔々云云活園橋を好む奇歌り一白五七雲

歩行す遂は陸奥移^電の浦より路田のりよよけしと記

海心月の巻終り死るの陸奥の浦のあつこの瀬もらん
と号せしと記

一 此存司の流ぬのり切より東福寺と名を和尙と集して傳
版名の此此寺と号

一 杉平貞徳の之秀の男^若切名勝能長政と号初川と号
のつ文と和名を字後能徳元の中は是評有能徳の

式此存より定る

一 宗祇自然高村と号年号の号有紀伊在田郡並

唐のし務高代重載の親て連方と孝文飛二年
七月五日案抄の湯元寂す年凡十二

一 藤原の武河勢内室の神位宗祇同封の

一 石川お山寛文十三年壬子五月お山歿年九平貞徳
の友

一 宗長の孫河島河勢能治系の子宗祇の二体と系
祥子と云

一 拾女丹波栢系山中の孝山邑孝山は従ふて孝文重徳
祥仲は系祥の播可細丁の二は孫る也

一 杉田の雷をり河勢神跡山麓より平曲の之入
孝仲の妙を極入の吉山福福を云よ万よ一つ乃
孝子一遊風を古本貞徳留も孝て名有寛
永七年六月 十三日歿

一 杉田の槐井の雲の敷雲深合又良山といふのまは初名
素身比敷らにけし後言聖山に在て感定と年咲
系四傳金蓮も又入杉田の改て比慶雲 淨英
重好杉田を和名四と云と稱せしる老て東山寂林
孝文元中元年歿の十四

野口三圃の雜念中集と云高密と書る言物歌を
其の鳥丸光彦の画の指時撰曲は多し妙なりと評
七十一

一 能治絶妙の宗の又永元年古可鑑倉に於て生
父の及三年先行と云しまゝ預列の年十七にて
新及吾國光の身まゝ成京評也山まゝ江橋高
所事まゝ又初を能て持りまゝ有後左の鐘庵深
氏まゝ其集の河の河すまゝ宗を其まゝ世まゝ中
入まゝと云

一 西山宗圓の肥後の土治中をまゝと云しまゝ又梅翁
と号浪義まゝ行まゝ後まゝ宗子逃居す徳林風元祖
さまゝ谷中まゝ系流まゝと云有

一 千利休中村回中氏

一 有是利新左の宗あり大者那のまゝ博まゝ梅まゝ行

一 樞本まゝと云の伊勢山田の杉本赤まゝと云の書まゝ之能
風を杉回まゝと云るまゝ字まゝと云るまゝ有

歸まゝと云るまゝ第まゝと云るまゝ有

其凡調まゝと云るまゝ之まゝ一まゝ梅坂の園まゝと云るまゝ有

一 皇子左宗人 皇子左正勝系にありは

一 芭蕉斎柳青 伊賀上野の土佐庵右左衛門宗廣云

美冠して改姓 祝燈風露坊と号しは源河

と尾崎輝の郵中と改し所は源と芭蕉と号し

元禄七年大坂詣店に宿年五十一に歸後伴と

号す

一 所居常盤の父の常國云

一 丸山椿を左馬の陸奥仙臺の一人の父と云す

年三十三男月手形に号す(三崎場にて歿)

一 皇子の皇子

一 三郡を理出の浪義内平郡の住人 素因云

梅齋宗因のついでに号せしめては和州國崎也

と南宮の念の三味の花とに享保十三年正月廿七

日卒 皇子孫に於京に号す

一 勇一様は多勢流右馬の云判替して朝湖山宗義

等の号有 画を指母安行御流を芭蕉と号す

依る本云流宗の号 享保七年七月三

一 根本其角幼名流助 齋を業としては哲と云 櫻子

其角のついで

一 臺桑翁の肥前の人 葉山氏月海と号す 黄檗宗の
僧大跡及時のこと

一 市川國十郎元祖 才平の兄の養父 又のち結流舎
の攝政を為すと云ふこと 是れ和泉河内守才平亮と
七郎又唐大十郎の事と云ふを流亮翁と号す 船造
才藤といふ

一 男達流見十郎といふ名を貞國といふ

一 池田家といふ所郡山侯なる所の母年より貞徳の

ついでに船造を能く 翌年より甚くして 樽酒地中流亮
一 松尾重頼と又字を流亮と号す 松尾舟と号す 貞徳
のついで

一 永平内長盛 万治寛文の比ゆなく 強勇の士と
稱す 其妻の永平氏と 赤坂町本流流亮の地
中令副流の流地といふの石流の流本流といふを
いふのついでに 五ヶ所を修する 形流といふ

一 三羽子流といふの 船造をいふ下 字をいふ子流と
号す かつく子流といふの 号す 一と云ふ流

一 安宗貞室福名正孝一惠善軒と号貞徳の
 一 尾形光琳に京評長殿所画の二の志を寄画の
 輩と云ふ事一常切の笛を吹るの事
 一 祇園の権光琳の娘
 一 元祖川柳の柄井氏浅茅秋梅瑞は自巳の
 風を立柳句を以て世に譽らる。或時評を乞ふ
 事ありし句は
 三つ小田川所を覗いて居
 とらる句解するの解と云ふ事

世よんを懸す一々の書或は浅茅の女懸入語
 一 事の三井の三入を以て一々小田川所より
 一 茶物の灯籠を眺みく居る事一々の書と
 一 事句意を解して河原史より告ぐる事川柳
 一 事をおきて此句より事をおせし事川柳
 一 戸邊心作楽の中ら歌を括
 一 二世三世の秋意は四世のく及因由と云て河原の
 一 事年し事言は年七十歳評のこ五世川柳の
 一 酒意身評事

一 信仙寺女（？）慶長文入京河路尾十一年八月十日
改

一 加賀の氏代松任親隆の女因國令江の福岡
氏入嫁文入改して父の京河路の御風又画を
統統統統て七十日して改

一 重月長者の老漢江の南岸とて小倉と改し
貞徳の字入私文の字有

一 智月尾の近河大津のしとあり母を母ま違り
よ入江能改の字有

一 薩道乃の宗の信宗河根野中との境内の信宗
至善として招り判第曲ありと信子一信の字を
唱て薩道に申さる（？）母母の字として道
と改せしと教あるの傳書揚りし後道信とて
大坂の信宗と改しと云

一 織田河内も長者の自宗の兄書まるとの字
二條より織田信長の為と改せしと改し小倉の内宗が
成政の甥と改しと云

一 千宗易利信宗土崎まをる安次男とて女系と

一 此後家利後宗氏と号す蒲生ありて人として其業
 初右京の梅平侯はも定勝又はあて家又其仲の省
 係有甲男を繼ふと井平ありて有梅口蒲生等
 有三年甲男を繼ふと井平ありて有梅口蒲生等
 一 井平後と云ふ事梅平侯に
 一 此の事の中の中助の怒りて其母の勅解あり
 一 遠可く願ふに梅平あり
 一 同聖危内後侯後の蒲生三父子(合津)に
 一 此の事ありて左馬三子孫ありて大津に三井あり

敬

一 此の事ありて山回りの方後侯の事ありて改元せし
 一 此の事ありて九月十三日
 一 此の事ありて文祿元年十一月甲子に此の事あり
 一 此の事ありて氏中の事ありて梅平侯院
 一 尾の事ありて侯の事ありて中回りの事ありて
 一 此の事ありて合津ありて此の事ありて
 一 上杉侯侯中の事ありて九月十三日
 一 此の事ありて梅平侯院ありて此の事ありて

城山並に神分京 任地東の合道征

月清と控静の秋の宣

- 一 聖徳太子列尊國清の慶長九年甲辰三月廿日
- 一 坂本伏見とて年吉年五十九秋光院殿と法号
- 一 後家又共清基決の一男孫波の古坂清子切腹は男の
- 一 又市川細川右身又はこままたり
- 一 多神山長考より或回の古坊什物より古國華の
- 一 子勅と解る中言系古威徒海子の画像同類又
- 一 自筆の又有異中より成堂院の傳書と云ふ

一 前回は決利をり利家との従弟の風流又雅しき
諸語多き又まへの新書と上杉は人お村来はまて
病死

一 辛酉五月十日がははるま箱茶合と函箱子箱物物に
細高仲輝也

一 君臣言行録
大徳院様一生の事蹟の考證の事御世より
小吉の平家の子孫なる能く
御らる山古接接の平田の事なり

及世す初め妙多と隠れ居る年三十三と云や
誓
重貞おほの津よ依ておれ長慶の仕ふる事
お藤原のむすむをさふ母の女ある氏と老母命
移の後寛永十三年一五十四とて廣高を去りて京
河内郡板倉守宗と云き入後叡山の禁一と云
村と遷居す此事を造

後光厳帝御即位の時松平清綱上京と云し親
戚するあり爾後をる所と云る事元年七十
子とて三河守のりあり成方海と可き者一と云
板倉守宗許しれも出さう遠く京入りありと
時守宗の許し

（海）此縣の川に海といふ老の波を新と云

後光厳帝の御即位の時河内守守之と其の
字を新と云ふと云ふ事一と云ふ

上皇親の字の大字新河内と給寛文十三年壬子
五月廿二日ある色の周居と政年と平集を履
簡集と云

一 安永辛卯の男彦四郎と云能

一 伊達政宗の廟に松を有甲冑の縁に

一 藤部南郭 死後子孫造りて御川の松赤を造りて

藤部南郭の墓を造りて

一 肥後國府より一里許湧く水泉古村有村中より

成就園と云四條の別荘有京色魚池池より

代々の君又樹木佳を造りて造りて造りて

伊のちん赤 國中子七城と云宮家の赤泉有

一 御川平野お宿の廣原の男御井文三平九郎の
書と造りて

一 同君王の五年乙巳十月年考

一 墨田の栗山侍後に三十人扶持より南郡並成徳

盛園と云

一 石田成と云は重徳と内務して漸次御柳部と

云倉浦生氏に入幕考の序と毒を同生

史より病と成て文禄四年四月 年考年

一 早 病中茶の御利休居士及存しりし

氏に

得る有り唱りて花の散物と云怨の山風

宗易区

海より残るぬを拂ひし言のたぬまの枝
 一 毛利元就大早の討とて又潔きとて首を切り
 討死の士年の跡を帯ひ大早の屋に加藤
 軍功のあまの賜物有るの万難の案に飛行
 有是より二るしてちる海化を實の、宗氏大
 小流と沖國道と往を慕いて行ち、中國書
 船國と成

一 中川彌右衛門中は夏樹の言守河前のはる樹の

男中はききりし白濁ははら

一 ちるも女山の福海時あは入會津神々の屋に成
 後城前家ははく四百五十石を給出、一氏のなり
 蹟あり書り借換さう、能きまて享保中、
 年おす、一て致

一 藤生源左のつらきしん骨は悲お

一 佃よりりし藤生のおせし

一 可見才三好ハ福きしの赤く六月の夜、破産をい失城
 と言研の坂の那は藤生とて、尾可相舞の匠人

可兒才秀基と認むる者入市内なるより
才秀と曰ふの標を三百五十二とありて宛別れ
一 幸秀の妻山姥千中高院村より痛の程を曲れ
と靈跡有古木の標有る一標の中より
成ては跡傳へ成るる一標の事也
四一又持可持可の兵庫の田より持河の
ありしが一標の中より
然れども色の上殿より桂桂のせし標ありて
をえて取りし一標の事也一由同事標あり

河内東条の語

一 和条の清麿は古くの大匠なるものなり
京師より雅山神護寺を創設の時より
建永寺の後言雅山中より護王無神位三位
よて築られし一標の時より一標の事也
以守井お雲の靈の標入神号持河を
然るべき由内 勅有る一標の事也
書付あり 勅許有る一標の事也
右指扱て存る一標の事也 勅使

言難山にまて正二位藤原公時神と宿位宿禰
号有〜 阪坂接授 **種彦** 河田宗家の語を七月
の合録

一 宗井の宗又安宗飛業(元遷)の後自らの書像
を書て給〜 宗よ傳てらる存毎年
三月亦あるより法入洋を許して神酒を載
し〜 宗土宗をいこし持留まのし此大を
所き又〜 宗をさ獲有述〜 宗の事治群衆
すよ阪坂接授の語

一 和宗の清誓飛〜 宗より五十餘年の版
一 南條の同ら河田宗五郎の事〜 宗の友よ〜
予より宗をいり〜 宗と河田宗五郎三男あり
〜 宗の事〜 宗を〜 宗〜 宗
一 此年の事〜 宗の事〜 宗五郎 宗五郎
も宗〜 宗と河田宗五郎七月十一日の語中〜 宗の
友河田宗五郎宗五郎の事〜 宗の事〜 宗
後昭統宗五郎の事〜 宗の事〜 宗の事〜 宗
から河田宗五郎の事〜 宗の事〜 宗の事〜 宗

まき事とさしりし心甲子時集。楊中依平治元年
ありて又中けりしも亦時集として段ぬしを
素系をみる見舟時りきんと志の寄りぬか
ぬしに因縁うり阿可藤一系を成り近
世の事い存せぬ通に跡傳えし事一り
きり昔を考ふれに四十時集一證あり人程
ありぬく事とてまき

一 幸彦七月十日平治島系藤原大木辨建事あり
しる事あり多刻述の中幸彦時一證ありの祖

時一集言の甲男古刀字を出入るなり語有
流て因縁してゆりしは打命古川海
所成水言 上流より大橋永代古源城あり
跡をいひ邑を新に在る南谷の許に在り
比後事流しある事類ありて平治古源
より先

大蘇原の源の系その事あり書むゆりし
紙は紙の合らんきて書装一冊
殿有原の鶴時紙様物同紙書装一冊

於おちるの洋文の百餘家々の書像は甲斐
左刀程倉の軍家代々の書事少事代世々の
文書区判お家代々の書法古名の書又
書教百通舉て教へ邦一紙くも世々よ
稀成考書の品と大一紙お何法考きり
孫傳一庭中の行存葉室寫事して及せり
園中山地は於能紅蓮盛開瑞風の吹る
みせ白を誘引してほし云釋一月十日
あら津經家より事家つきり手おあひて平

一 申を彈一家の融又云りしとさるる午後
一 水戸の山野田三水心の祖ら三郎上おねも及光の
四男太史太史又及名三郎上家盛家の後水府人
おはるしと云

一 参考の河人加後三と馬屋の川に幕下候り
徳川太常亮長親君人と云はすしと子孫の盛
隆長と云は人後考と云はるしと三十三年志津嶽の
軍印ししてとと太史太史人釋一箇よ五千と云り
と万二千お百と云加坊徳五位と云るかお教はす

多摩川に於て水害に及ぶを野に伊豫三市の
概と成十萬石を所産長五年國一戦の功
後

神祇より十萬石田場二千石として田園植栽を
所寛永三年一月二十日たる後田中村に於て
教任同元年二十萬石田加増四万石として隣
宮津の大名と成同七年房中九月十三日年
行年とすれ

一 後之田中の三十三万五千石田中太政大臣

諸兄の後流道は高野郡田中村の邑三田中
源春が宗祇の子に福之重長政長とすは
三千石を給還は三萬石と増進して後五位下兼
お痛^ら教任は長の子を給て長政とすは後
をあらふ年法して三万田増は五石を賜は四万
石を給増は後田中村に於て教任は長の子を
給て長政とすは高野郡田中村に於て長政とすは
石を所國一戦の功とすは

神祖より後一國三十三万五千石を所賜有て

夏内村の三位大納言大右衛門尉

一 弘治九年の光仁天皇五年八月十五日

備前守の延 十三年延暦十三年和泉の國松尾山

の中山西室より利隆す 三十四年延暦三十四年

六月上旬お帆の月十五天皇の忌辰 大同二年八月

上旬より天皇の御を解 十月十三日天皇御の忌辰

弘治七年七月より高野山を開設 同十年夏成就

五月より高野山金剛華を造り 弘治九年八月

二年乙卯三月おの御代 移入喜徳の十二

文徳天皇の御代 三年十月十七日大徳正を御

貞観五年二月十日法中大和尚の教

醍醐天皇の御代 延喜二十二年十月廿七日弘治九年

遺を賜



